先進校に学ぶ
キャリア教育
の実践

CASE 1

石川・県立 小松商業高校

地域に開かれたキャリア教育で学校の存在感をアピール

取材・文／永井ミカ　撮影／相馬 力

進路未定者ゼロ

地域との連携

「目指せスペシャリスト」指定

>>School Data
商業科、情報処理科／1921年創立
生徒数／468人（男子93人・女子375人）
進路状況（2007年度実績）／大学 10.9%・短大 14.1%・専門学校 17.3%・就職 57.7%
石川県小松市希望丘10
TEL 0761-47-3221

Outline　キャリア教育の全体像

明確な進路志望をもって入学する生徒たち

加賀平野の中央に位置し、古くから産業都市として発展してきた石川県小松市。産業機械・建設機械の（株）小松製作所を中心に、多くの企業が集まっている。その小松市にある小松商業高校は、間もなく創立90周年を迎える伝統校であり、親子2代、3代で通う生徒も少なくないという。

同校へは「地元の大きな企業に就職したい」という希望をもって入学してくる生徒が多い。就職希望者の就職率は100%で、ほぼ全員が県外には出ず小松市かその周辺で就職する。大企業志向が非常に強く保護者も熱心だ。また、進学者も平均4割程度いるが、指定校推薦等がほとんどなので浪人は出ない。例年、進路未定のまま卒業していく生徒はゼロである。

同校が企業や大学などから評価されている理由のひとつには、資格取得奨励への取り組みが挙げられるだろう。1年次から簿記の習熟度別指導を取り入れたり、専門学校から講師を招聘するなど各種資格取得に力を入れており、全国商業高等学校協会主催の各種検定1級3種目以上合格者数は昨年度89人を達成。難関資格の取得率は全国でもトップクラスを誇ってきた。

社会人として、大学生として恥ずかしくない人材を送り出す

高度な資格取得を進路指導の大きな柱としてきた同校だが、中教審答申で「キャリア教育」の重要性が謳われた99年から、一人ひとりの生徒の内面の変容や、能力および態度の向上に主眼をおく「進路学習」へと舵を切った。そして03年から05年まで、文部科学省による「学力向上フロンティアハイスクール」の指定を受けたことを機に、新たな取り組みをスタートさせたり、以前から実践してきたもの（図1）を整理・体系化した。

地域に貢献する人材を育てるため、同校では地域と連携し活性化にもつながるような取り組

教務主任
山田康雅先生

進路指導主事
山田雄二先生

教頭
越川司朗先生

校長
福島 洋先生

みを多く行っている。一般の人も対象にした「ふるさと小松検定」の開発や、ビジネスモデルの学習にもつながる「地域プロデューサー小商」の活動などである。そして、同時に総合的な学習の時間を使ったキャリアガイダンスの充実にも力を入れてきた。

そのほか、「部活動全員加入」「遅刻ゼロ100日運動」「朝読書」など数々の取り組みを行っており、それぞれ成果を挙げている。遅刻ゼロは毎年連続して100日以上を達成。朝読書は毎朝10分間の読書タイムを設けたもので、部活動の朝練と学習のいい区切りになっているそうだ。熱心な図書館司書が、図書館のレイアウトに気を配ったり、生徒一人ひとりの読書傾向をチェックしたりしたこともあり、07年度の貸し出し冊数は年間6649冊に達した。

教職員が協力しあい学校が一丸となって取り組みを進めていける理由のひとつは、1学年4クラスと学校の規模が小さいこと。また、進路指導主事の山田雄二先生は「すべての取り組みは、社会人、大学生として恥ずかしくない人材を育てるために何をすべきか考えて実践しています。その根本的な部分は以前から揺らいでいないため、同じ考えに基づいて行動できているのだと思います」と語る。

Close up ① キャリアガイダンス

ふるさと学習もキャリアガイダンスの一環

社会や職業についての理解を深め、進路について主体的に考え、実現させる能力を育むことを目指す「総合的な学習の時間」を導入したのは

図1 キャリア教育に関連する取り組みの年表

年	内容
2003年	●文部科学省「学力向上フロンティアハイスクール」に指定（03～05年度）
2004年	●第1回小商フェスティバル実施 ●遅刻ゼロ100日運動開始 ●朝読書開始 ●キャリアガイダンス実施
2005年	●ふるさと小松検定を創始
2006年	●第1回ふるさと小松検定実施
2007年	●文部科学省「目指せスペシャリスト」事業の指定（07～09年度） ●「地域プロデューサー小商」立ち上げ

図2 キャリアガイダンスの実施計画

1年次	2年次	3年次
進路ガイダンス①	進路ガイダンス①	進路ガイダンス①
進路の手引進学編説明	進路希望調査	進路希望調査
進路の手引就職編説明	教養（漢字勉強）	教養（漢字勉強）
進路ノート配布・進路ノート①	第1回小論文テスト	第1回総合学力テスト（リピート）
教養（一般教養）	教養（一般教養）	教養（総合学力テスト勉強）
進路ノート②	第1回小論文テスト（リピート）	教養（総合学力テスト勉強）
進路ノート③	第2回小論文テスト	第2回総合学力テスト
進路説明会	職業適性検査	教養（総合学力テスト勉強）
進路ノート④	進路の手引進学編説明	進路ガイダンス②
進路ノート⑤	第2回小論文テスト（リピート）	進路希望調査
教養（一般教養）	教養（一般教養）	教養（一般教養）
進路ノート⑥	第3回小論文テスト	面接指導
ふるさと学習①	ふるさと学習①	ふるさと学習①
ふるさと学習②	ふるさと学習②	ふるさと学習②
ふるさと学習③	ふるさと学習③	ふるさと学習③
石川県若者しごと情報館	ふるさと学習④	ふるさと学習④
進路希望調査	第3回小論文テスト（リピート）	これからの生き方①
日本語運用能力検定	進路希望調査	これからの生き方②
作文テスト	総合学力テスト説明・テキスト配付	これからの生き方③
第1回小論文テスト	ジョブカフェ講演会	消費生活講座
進路ノート⑦	職場見学会事前学習	教養（一般教養学習）
スキー研修事前研修	教養（一般教養学習）	教養（一般教養学習）
小論文指導	教養（一般教養学習）	
第1回小論文テスト（リピート）	教養（一般教養学習）	
進路ノート⑧	教養（一般教養学習）	
進路ノート⑨	第1回総合学力テスト	
進路ノート⑩		

※進路ノートは全国高等学校進路指導協議会の『高校生の進路ノート』を活用

生徒たちによく活用されている図書室。読書活動優秀実践校文部科学大臣表彰を授与されている。

04年。全学年で月曜の7限目をあて、名称も「キャリアガイダンス」とした。年間計画を細かいところまで作り込みすぎたために無理が出そうになったという反省点から、現在の年間計画（図2）は柔軟な対応ができるよう、ゆとりをもたせて作成している。ただし、大きな流れは当初と大きく変わっていない。

進路指導に関して特に問題を抱えていなかった同校がキャリアガイダンスに取り組んだ理由は、入学してくる生徒の多様化が挙げられる。例えば、高卒で地元企業に就職したい生徒だけでなく、部活動に力を入れ進学もしたいという生徒などが増えてきたのである。また、就職率100％とはいえ、生徒の適性に合ったよりよい職場とマッチングさせるためには、出口指導に重点を置いた進路指導だけでなく「進路学習」の要素も必要と考えた。

一方、年間計画のなかで特徴的なのはふるさと学習の時間。地元企業に小松市のことを知らない生徒は渡せないし、地元の産業や歴史を知ることによって、様々な職業への理解も深まるそうだ。「地元に根付いた、地元で働く、地元の産業を支える人材を育てていく学校とはどうあるべきか。それを考えると、ふるさと教育と本校のキャリアガイダンスはかけ離れたものではありません」と、校長の福島洋先生はいう。

カリキュラムの大枠を作るのは山田雄二先生。細かい部分は各学年でつめる。そしてキャリアガイダンスを担当する教員については、学年主任と、進路、教務、特活指導から1人ずつの計4人が、1学年4クラスを受け持つかたちだ。「いろいろ試しながら今年はこれでやっています。例えば教務が1時間もらって学年全体で選択科目についてのガイダンスを行うなど、効率よく時間を使えます」と、教務主任の山田康雅先生は語る。

Close up ② ふるさと小松検定

ふるさと学習を発展させ地域を巻き込んだ「検定」に

同校が05年に創設した「ふるさと小松検定」は、一般の人をも対象にしたご当地検定である。最初は3年生の商業科の教科である課題研究の時間を使い、小松の文化や産業についてのテキストを作ることから始まった。約10人の生徒に1人の教師がつき、「郷土料理」「方言」「人物」といった班ごとのテーマに沿って調査、取材をし、テキストに編集していった（写真）。これを元に問題をつくり、毎年検定を実施。一般の人に受験してもらうため、生徒たちからなる「セミナー」班が幼稚園や小中学校などにも出向いたり、学校に来てもらったりしてPRをした。

ふるさと小松検定は生徒にとってまるごと体験学習だった。膨大な資料を、一般に公表する完成度をもってまとめるのは簡単ではない。現地取材に赴くことで、いかに既成の情報に誤りや別の解釈があるかを知り、著作権について学習し、情報処理能力やコミュニケーション能力を伸ばしていったのである。その結果、レポートでインターネットの情報を丸写しする生徒や、キャラクターを勝手に使用する生徒がいなくなった。インターンシップや就職活動で、企業に電話をかける際にもあまり緊張しなくなったという。小さな子どもからお年寄りまで、あらゆる人と接する機会がもてたのは、生徒たちにとって貴重な経験だった。

ふるさと小松検定テキスト。2005年度から事業を開始し、07年度に完成版と英語版ができた。

小松市の財産として検定をNPO法人化

懸命なPRの成果もあって、取り組み3年目の07年度は2289名がふるさと小松検定を受験。同校の生徒もキャリアガイダンスの時間にふ

2008年9月12日に行われた小商フェスティバルの様子。小松駅前の商店街に高校生による24店舗が並び、吹奏楽部による演奏スペースも設置。各店舗には店長・副店長・会計責任者がおり、時間ごとの売り上げ台帳や収支報告書の提出が義務付けられている。写真左「福もち」は生徒が商品開発したもの。

るさと学習を行い、全員が検定を受けている。新聞などにも数多く取り上げられた。「単なるふるさと学習ではなく、検定というところで、資格取得に強いわが校らしさを地域にアピールできました」と山田康雅先生はいう。小松市は今後、企業見学などの産業観光の分野での発展が期待されており、長い目で見れば、その分野で活躍できる人材の育成にもつながると考えられる。

そして08年度から、ふるさと小松検定をNPO法人化。「市民に定着し、検定は小松市の財産になりつつある」というのは、教頭の越川司朗先生。「課題研究の授業を、新しい課題を見つけて、それを探究する場にし、検定の運営はNPO法人が中心になってやっていきます。法人化という作業も、商業高校にとって実践的な学習になり有意義だったと思います」と語る。

Close up ③ 地域プロデューサー

「目指せスペシャリスト」事業で商品開発や観光の学習に着手

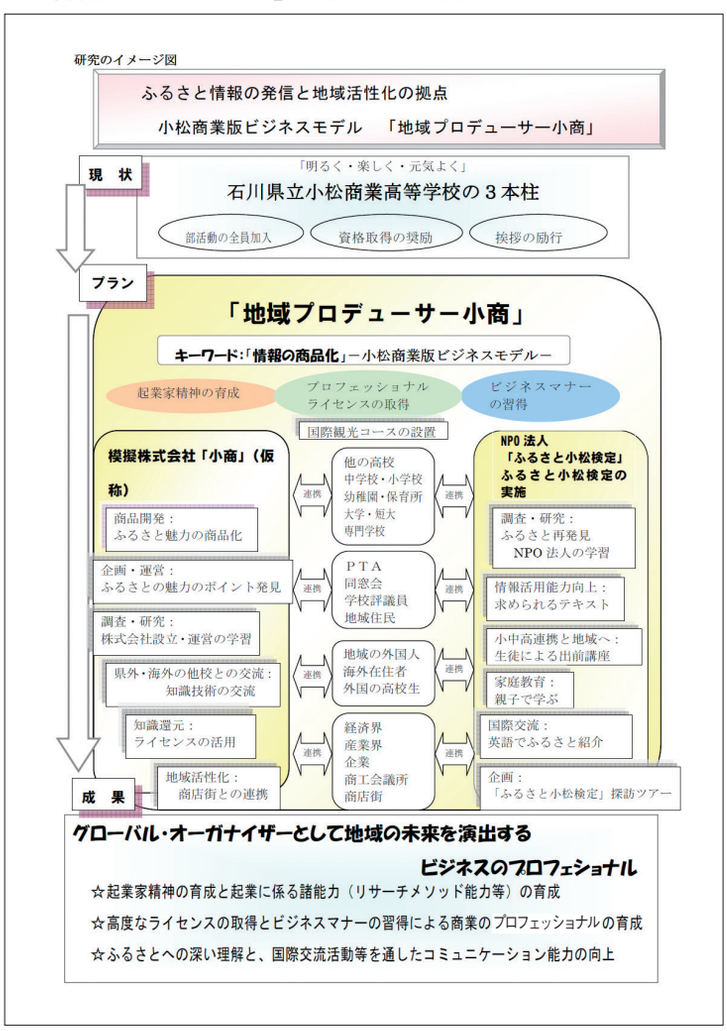
同校の地域連携には2つの骨格がある。ひとつは前述の「ふるさと小松検定」。そして、もうひとつが「小商フェスティバル」である。フェスティバルは学園祭ではなく、小松の市祭「どんどん祭り」の一部として参画するもの。地域の活性化と商業科の学習を目標に、地元の企業と連携して商品を開発・販売したり、地元商店との合同店舗を出店するなどしている。そのための模擬株式会社「小商」を設立。小商は持ち株会社であり、その子会社が販売を担当している。

この2つの取り組みの商業教育の観点が認められ、同校は07年度から文部科学省による「目指せスペシャリスト」事業の研究開発校に指定された。そこで、小松商業版ビジネスモデルとして「地域プロデューサー小商」を立ち上げ、ふるさと情報の発信と地域活性化の拠点となることを目指している（図3）。

まだ構想段階なのは海外交流くらいで、ほとんどの計画は、このために創設した選択科目「地域プロデュース」を使い次々と実現。商品開発では地元企業と協力して小松ブランドのお菓子を開発し、小商フェスティバルや駅での販売にこぎつけた。デパートや空港でも生徒らが販売し、「子ども連れの母親が買うケースが多い」という実感から、子どもに向けたウエハースタイプのお菓子も追加販売。パッケージも生徒がデザインし、中にはふるさと小松検定の問題を入れている。

そのほか、一般の人を対象にした、ふるさと小松検定の探訪ツアーも運営。企画、募集から始ま

図3「目指せスペシャリスト」研究のイメージ図



生徒たちが企画し、地元企業と共同で作ったオリジナルブランドのお菓子。

り、外部講師を招いて案内やもてなしについて学ぶなど、生きた体験学習となっている。なお、07年度には国内旅行業務取扱管理者試験に初挑戦。手探り状態ともいえるなか、生徒4人が受験し2人が合格した。08年度からは、観光に関する授業も始まっている。

教育活動をアピールすることが求人票の獲得につながる

これだけのことを次から次へと仕掛けていっている背景には、全国的な普通科志向もある。「商業高校は普通科高校以上に特色を出していかなくては生き残れません。川をひとつ越えれば文化もがらりと変わってしまう地域ですから、地域と仲良くし、地域に生徒を育ててもらうという意識が重要。立ち止まるわけにはいかないのです」と福島洋校長先生。そういった共通意識が、先生方を団結させている。会議の時間はなかなかとれなくても、常に周りの意見を聞きながら担当者が物事を決めていき、最終的に決まったことには全員で協力する。

地元に根を張りがんばろうとする生徒たち。就職活動では産休などの制度に着目する生徒も増えてきた。県外のテーマパークで働いてみたい。でも30歳になったら小松に戻りたい。そんなとき簡単に仕事を見つけて戻ることができるのだろうか。生徒たちは冷静に考えるようになった。地元の特産物を知ることで、例えばJAの仕事にも興味が出ることもある。

一方、教員は、例えば製造業で重要となる職場のにおい、アレルギー物質、温度などの情報を収集し、生徒たちに伝え、一緒に考える努力も始めている。個人個人の満足度の高い就職口を斡旋したいという思いがある。

「進学校の場合は、来年も東大や慶應義塾大を受けられます。でも、私たちには、例えば次も小松製作所を受けられるという保証はありません。求人票をもらえなければ土俵に乗れないのです。ですから、ふだんの教育活動を地元にアピールしていかないと」と山田雄二先生。地域活性化の拠点になるという目標を掲げ、積極的な活動を続ける小商に対する、地元の期待は大きい。

INTERVIEW

地元の魅力に気づきコミュニケーション力が身についた

河中拓郎さん　2008年3月卒　消防士・NPO法人ふるさと小松検定理事長

3年生の時、課題研究の授業でふるさと小松検定のセミナー班に所属していました。保育園や小学校、中学校などに出向いて検定についてのセミナーを開催するのが役目。小さい子ども向けには○×問題にしたり、中・高校生向けには5択にしたりと、みんなでアイデアを出し合って工夫しました。パワーポイントを使い、いかにわかりやすくまとめるかが難しかったです。最初のセミナーは緊張してどうなることかと思いましたが、だんだん人前で話をすることに慣れました。おかげで、就職の面接にも落ち着いてのぞめたし、現在の職場（消防士）で、消火器の使い方を子どもに説明する役目には自分から手を挙げました。今では、様々な年齢の人と話をするのにあまり抵抗感はありません。

ふるさと小松検定に関わったことで、正直それまで興味のなかった、小松の豊かな自然や美しい景色などを知ることができました。地元のことを知り、好きになることができて、本当によかったと思います。ふるさとを大事にする気持ちが生まれ、小松の魅力をもっとほかの人にも知ってもらいたいと思い、ふるさと小松検定のNPOの代表をやらせてもらっています。小松商業高校はいい学校だったと思います。学生時代は陸上部に打ち込み、将来は消防士になる、という夢がかないました。フェスティバルなどでの地域の人たちとの交流も楽しかったです。

≫小松商業高校に学ぶ実践ノウハウ

- ●委員会などの組織は最小限にとどめ、学校全体でそれぞれの事業に取り組む。
- ●育成する人材像を明確にし、教員が共通のビジョンをもつ。
- ●学校が考えた企画に生徒が参加し体験学習の場とする。
- ●キャリアガイダンス、地域学習などの取り組みに、商業科ならではのオリジナリティを付加。
- ●イベントに参加するなど地域と連携しながら、教育活動の成果を積極的にアピール。
- ●文部科学省などの事業を利用し、活動の枠を広げる。